

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の 代表者 (学長)	(大学名)	九州産業大学	機関番号	37102
	(ふりがなくローマ字) (氏名)	SAGO TAKASHI 佐護 譽		

2. 大学の将来構想

九州産業大学は、開学以来「産学一如」を建学の精神に掲げ、市民的自覚と中道精神をもった実践的かつ建設的な人材を輩出してきており、平成20年度では8学部7研究科を擁する大学となった。近年の社会的ニーズの大幅な変化、学問諸分野と科学技術の急速な発展などは、大学と社会との融合を求めようになり、本学ではこのような時代の要請に応えるために、今後の社会が求める人材を、時代のニーズに合わせて柔軟に養成し、実践的な知識と知見を有する高度な専門的職業人、技術者および研究者を育成していくことをこれまでも方針とし、今後もそうしていく考えである。

本学の「柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム」ではこの方針のもとに、日本が世界に誇る伝統的な文化財である柿右衛門様式磁器を以下の4点において総合的に研究した。①同磁器が国内外の陶磁器界の歴史的な発展に貢献した具体的な役割を明らかにする。②同磁器がオランダ東インド会社との貿易を通して、西洋の王侯貴族の貴重な収集品としてバロック文化を彩った文化史的な役割を具体的に明らかにする。③現代の陶芸技術の水準の向上を図るために、柿右衛門様式磁器とその前後の時期の肥前磁器の素材を科学的に分析する。④肥前磁器の意匠をデータベース化して、現代陶芸の意匠にそれを活用する。また、柿右衛門家に所蔵される土型を縮小再現して、文化財の保存に役立てる。このような総合研究の結果、国内外における柿右衛門様式磁器の所在調査報告書、売立目録の調査と研究に関する報告書、土型と磁器の再現、技法報告書、意匠データのデータベース化、名工の技法の記録等の成果が得られた。柿右衛門様式磁器に関する本プログラムの総合的研究は、伝統工芸の学問的研究およびその復活再興による伝統産業の発展への寄与、更に若手研究者の育成という課題の達成に繋がるとみなされる。

3. 達成状況及び今後の展望

①達成状況：意匠・技法・歴史の3部門からなる本センターが当初から目指した事業目標は、国内はもとより欧米の諸機関に収蔵される柿右衛門様式磁器に関する

総合的研究である。更にその研究成果を大学院の陶芸教育に活かし、ひいては日本の伝統工芸の水準の向上を図ることも目標に入っている。柿右衛門様式磁器に特定した総合的研究は、従来の陶芸分野の研究では未曾有のことであり、本センターがこれまで挙げることのできた研究成果は、客観的な評価に十分耐え得る独自の内容のものであると自負できる。中間審査で得た「当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と判断される」というAランクの評価もそれを示している。有田磁器の文様集成や土型の復元、名人技の記録、柿右衛門様式磁器の科学的分析と再現、国内外における同磁器の所在調査およびオランダ東インド会社による日蘭貿易の研究ならびに売立目録の研究など、各部門におけるこれらの事業は全て当初の計画通り実施され、多方面から柿右衛門様式磁器について光を当てることができた。これらの事業を推進するに当たり、国内はもとより国外の多くの機関と研究上の国際的なネットワークを形成することができ、第一線にたつ国内外の陶磁史研究者との学問的交流をなすことができたことも、本事業の大きな成果である。ドイツ、オランダ、英国、アメリカにおける柿右衛門様式磁器の所在調査とカリキュラム調査、および三度に亘る国際シンポジウム等及び講演会を通して、柿右衛門様式磁器に関する総合的研究はかつてない昂りをみせた。

②今後の展望：21世紀COEプログラムの事業推進センターである「柿右衛門様式陶芸研究センター」は継続する。COEプログラムによる5年間の事業成果を大学の共通講義および芸術学部と芸術研究科のカリキュラムで活用するとともに、それまでの事業を大学の予算で継続する。更に同センターは伝統的工芸品産業の活性化のための調査を行い、商品開発を支援して、地域産業の昂揚に貢献することを目指す。具体的には以下の通りである。

九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センターの概要

① 趣旨

柿右衛門様式陶芸研究センターは、平成16年度に文部科学省の21世紀COEプログラムに選定され、世界最高水準の研究教育拠点形成のため、意匠、技

法及び歴史研究・カリキュラム開発の3部門それぞれの高度な研究をベースに若手研究者育成等を中心とした事業推進をおこなってきた。平成16年度から国の補助金を受けて研究をおこない、各部門の研究成果は国内外の柿右衛門様式研究の基礎研究の資料としての先鞭となっている。これらの研究に加えて、意匠・技法部門では名工技術の記録や意匠のデータベース検索システムを構築し、歴史部門においても売立目録のデータベース検索システムを構築している。

以上の補助事業は平成20年度を以て完成年度となるためセンターの継続をどのような方針のもとで運営していくかを検討した結果、COE完成年度にあたって、専門職大学院設置の考えを見直し、学部および大学院教育が地域の行政や産業、流通及び消費者と密接に関係させ、研究成果を教育に還元していく必要がある。そのため、芸術学部を有する本学は、他大学にない優位性をより鮮明にし、差別化の戦略を図る必要がある。

実績に示したセンターの研究活動等を通じてセンターの継続のためには、学生(芸術系学生及び一般学生)、とくに九州の伝統的産業とその地域の行政、流通及び消費者とが密接に連携したシステムを構築し、教育を充実する目的のためセンターの継続をはかる。



最終展示会(九州産業大学美術館)2009.1

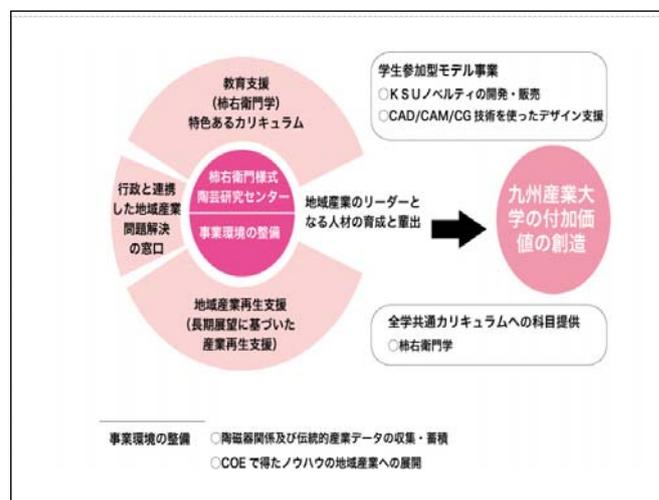
②主な業務 (21年度)

- (1) 古陶磁器等のデータベース及び資料の整理・管理・蓄積に関すること
- (2) 素材選択、成形、釉薬及び焼成における未知の技術の分析及び開発に関すること
- (3) 高度な理論と技術を身につけた陶芸家の育成に関すること
- (4) 破損した土型の再現研究

以上の4点を主な業務として平成21年度は教育・研究を実施していく

③大学院および全学的なカリキュラムへの反映

本学では当事業の成果を積極的に教育に生かすことを検討しており、現在カリキュラムの検討作業を行っている。そのため、芸術研究科では本年度大幅なカリキュラム改正のための作業を行っている。また、本プログラムの全学部が受講する全学共通カリキュラムとして検討しており、実施されれば九州産業大学の特徴ある教育科目として期待できる。



2009年4月からCOEを継続している柿右衛門様式陶芸研究センターの概念図

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	九州産業大学	学長名	佐護 譽	拠点番号	K 2 8	
1. 申請分野	K〈革新的な学術分野〉					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム (Program of Kakiemon-style Ceramic Art Research Center) ※副題を添えている場合は、記入して下さい(和文のみ)					
研究分野及びキーワード	〈研究分野: 哲学〉 (美術史)(美術諸学)(文化交流史)(芸術研究)(陶芸)					
3. 専攻等名	芸術研究科造形表現専攻、工学研究科生産システム工学専攻、 経済学研究科経済学専攻、国際文化研究科国際文化専攻					
4. 事業推進担当者	計 16 名					
ふりがな(ローマ字) 氏 名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(宛点リーダー) SHIMOMURA KOUJI 下 村 耕 史	芸術研究科(造形表現専攻) 教授	ドイツ・ルネッサンス美術史 文学修士	美術史・芸術論的見地からの陶磁芸術に関する理論研究及び本プログラムの統括			
SAKAIDA KAKIEMON 酒 井 田 柿 右 衛 門	芸術研究科(造形表現専攻) 客員教授(平成20年4月1日職名変更)	工芸創作(陶芸) 美術学士	柿右衛門様式の色絵磁器を中心とした新たな陶芸創作の研究			
KAJIHARA SHIGEMASA 梶 原 茂 正	芸術研究科(造形表現専攻) 教授	工芸創作(陶芸) 工学士	古陶磁器技術の復元を中心とした新しい陶芸創作研究			
ETOU HIDEO 江 藤 日 出 男	芸術研究科(造形表現専攻) 客員教授(平成20年4月1日職名変更)	工芸創作(鑄金) 芸術学修士	素材研究 土型の制作、釉薬としての緑錆の採取			
UEDA KATSUYA 上 田 勝 也	芸術研究科(造形表現専攻) 教授	絵画創作(日本画) 芸術学修士	陶磁芸術における日本画表現の応用展開研究			
KIKUTAKE JUNICHI 菊 竹 淳 一	芸術研究科(造形表現専攻) 教授	東洋美術史 文学修士	東洋美術史上における陶磁芸術の美意識の影響に関する研究			
KAMAHORI FUMITAKA 釜 堀 文 孝	芸術研究科(造形表現専攻) 教授	製品開発 博士(工学)	陶磁芸術に関するデザインの研究			
TSURU TOSHIAKI 津 留 壽 昭	工学研究科(生産システム工学専攻) 教授	無機材料化学 工学博士	陶磁器素材の分析・調査・開発に関する研究			
OGAWA KISABUROU 小 川 規 三 郎	芸術研究科(美術専攻) 客員教授	工芸創作(織物)	伝統的織物意匠の陶芸への応用の研究			
YAMAMOTO IWAO 山 本 盤 男	経済学研究科(経済学専攻) 教授	発展途上国論 博士(経済学)	アジアとヨーロッパの通商関係(オランダ東インド会社等を含む)の研究			
UCHIYAMA TOSHINORI 内 山 敏 典	経済学研究科(経済学専攻) 教授	統計学・計量経済学 博士(農学)	陶磁器等の意匠データ収集方針の検討及び分析等と陶芸専門家養成に関するアンケートの実施			
TAKATSUJI TOMOYOSH 高 辻 知 義	柿右衛門様式陶芸研究センター 教授(平成20年4月1日所属部局変更)	ドイツ文化論 文学修士	陶芸専門家養成に関する情報収集と海外の陶芸研究のネットワークづくり			
SUZUTA YUKIO 鈴 田 由 紀 夫	九州産業大学大学院芸術研究科美術専攻 非常勤講師	日本陶芸史 芸術工学修士	柿右衛門様式及び有田を中心とした陶磁器の歴史研究			
PAKU TE SON 朴 泰 成	九州産業大学芸術学部美術学科 非常勤講師 (平成20年4月1日所属部局変更)	工芸創作(陶芸) 博士(芸術)	柿右衛門様式の陶芸の研究			
KOGA MICHIO 古 賀 道 生	工学部物質生命化学科 准教授(平成17年6月1日追加,平成19年4月1日職名変更)	分析化学 博士(工学)	色絵磁器の組成・色彩・熱挙動に関する調査研究			
KOBAYASHI SHIGEO 小 林 繁 夫	工学部物質生命化学科 准教授(平成17年6月1日追加,平成19年4月1日職名変更)	無機材料化学 博士(工学)	陶磁器顔料の結晶学的解析・開発に関する研究			
5. 交付経費(単位:千円) 千円未満は切り捨てる () : 間接経費						
年 度(平成)	16	17	18	19	20	合 計
交付金額(千円)	13,000	49,000	46,370	49,200 (4,920)	44,580 (4,458)	202,150

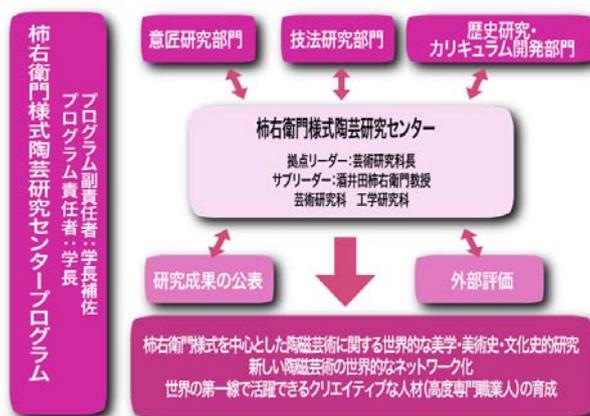
6. 拠点形成の目的

拠点形成の目的・必要性・重要性：日本が世界に誇る伝統的な文化財である柿右衛門様式の色絵磁器は、日本の陶磁器界の歴史的な発展に貢献するとともに世界中で尊重され、西洋で最初の磁器であるドイツのマイセン焼の成功を促したが、今日までその全容について研究されていない。本学は「柿右衛門様式陶芸研究センター」を設立し、柿右衛門様式についてその全体像を解明するとともに、その成果を大学院の陶芸関係のカリキュラムに反映させて、伝統工芸の水準の昂揚を目指す。この点が革新的な学術分野と言える。「柿右衛門様式陶芸研究センター」の研究陣は、人間国宝・14代酒井田柿右衛門をはじめ、それぞれが各専門分野で高い業績を挙げており、また施設・設備面においても、門外不出とされてきた柿右衛門様式窯や、既設の「総合機器センター」にも優れた分析装置が整備されている。この充実した環境の下に学生たちは学部段階から自由に実習に打ち込むことができ、陶芸教育では既に世界的なレベルにあると自負している。陶芸専攻の大学院生には、有田の窯場の現場で職人とともに制作に従事する機会も与えられる。本拠点では、この分野の他の研究機関のように広く陶磁器について扱うのではなく、柿右衛門様式の陶芸に的を絞り、①意匠研究部門、②技法研究部門、③歴史研究・カリキュラム開発部門の3研究部門からその全体像について解明し、その成果を大学院の陶芸関係のカリキュラムに反映させることにより、伝統工芸の昂揚が目指されている。以上の点がユニークと言える。更に「柿右衛門様式陶芸研究センター」では、外国の陶芸家や研究者と連携して研究を進めることにより、陶芸研究の国際的なネットワークを形成する。また我が国の伝統工芸を代表する有田の磁器を科学的に解明することによって、日本の伝統的な陶芸全般に対する海外の陶芸家や研究者の関心が高まることが期待できる。

5年後の期待される成果

- 1) 柿右衛門様式磁器を中心とした古陶磁器等の意匠データの蓄積による柿右衛門様式の研究の進展と陶芸デザインの向上
- 2) 古陶磁器等の制作技術の解明・応用による新たな伝統陶芸の発展
- 3) 名工の技術の記録・研究による若い陶芸家の技能の向上
- 4) 古陶磁器の素材の分析
- 5) 柿右衛門様式磁器の歴史研究の進捗
- 6) 世界的な陶芸研究拠点の形成
- 7) 専門職大学院における陶芸教育の改善による高度な技術を持った伝統陶芸専門家の育成

申請時に掲げた拠点形成の目的



申請時における全体の概念図

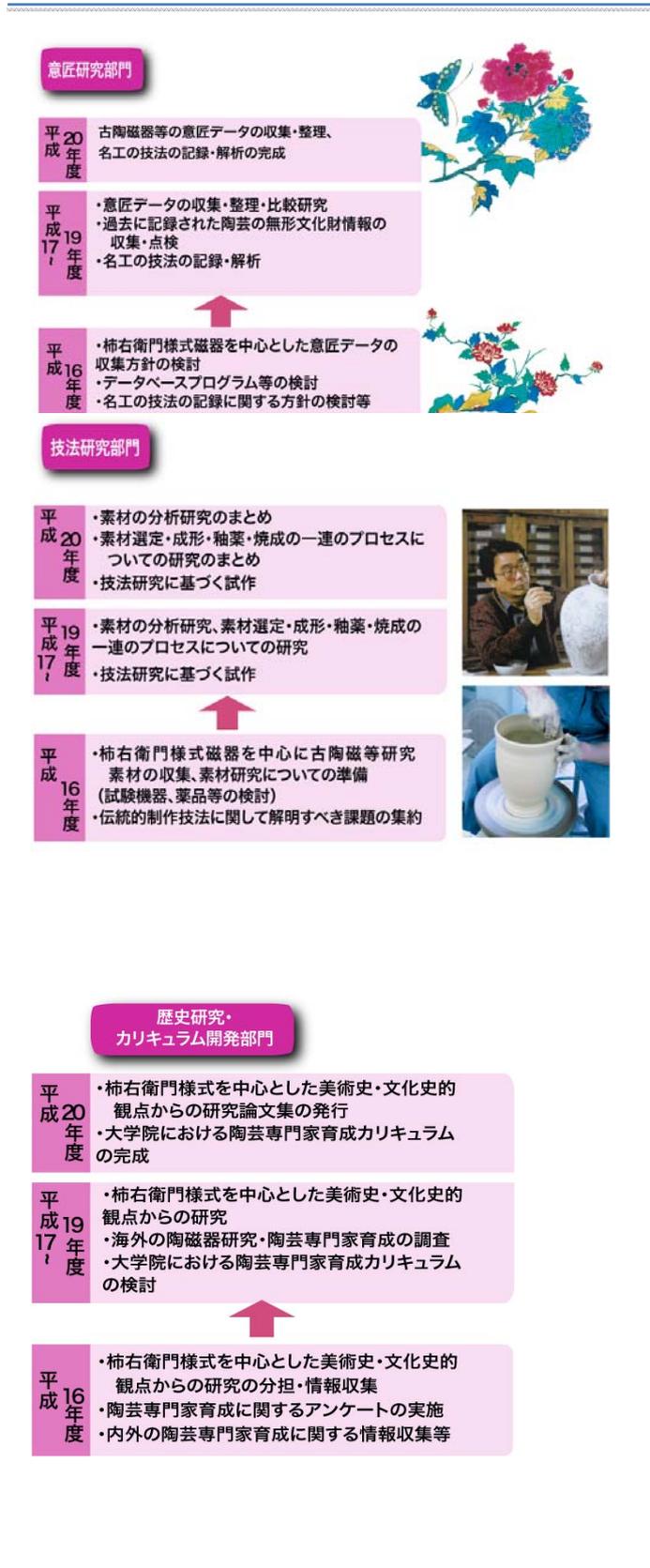
7. 研究実施計画

本プログラムでは、「柿右衛門様式陶芸研究センター」を組織し、①意匠研究部門で、柿右衛門様式磁器を中心とした古陶磁器等の意匠や名工の技術の記録・分析・比較研究を行い、②技法研究部門で、伝統陶芸の技術を解明し、③歴史研究・カリキュラム開発部門で、柿右衛門様式に関する美術史・文化史的研究を行うとともに、大学院における陶芸専門家養成のカリキュラムを開発する。各部門の具体的な実施計画は以下のようである。

①意匠研究部門：柿右衛門様式磁器を中心に古陶磁器等の意匠データを収集し、それらの資料のデータベース化を行い比較研究する。柿右衛門家に所蔵される土型の3次元計測を行い、70%の縮小でそれらを再現する。また名工の技法の記録(対象、記録方法)に関する方針を検討して、磁器制作の工程を記録し解析する。

②技法研究部門：柿右衛門様式磁器を中心に古陶磁器等の研究素材を収集する。伝統的制作技法に関して解明すべき課題を検討する。作品を選んでその素材を科学的に分析する。分析の結果に基づいて、古陶磁器の素材を特定する。特定された素材を用いて成形・釉薬・焼成のプロセスを解明する。このようなプロセスの解明に基づいて古陶磁器を再現する。

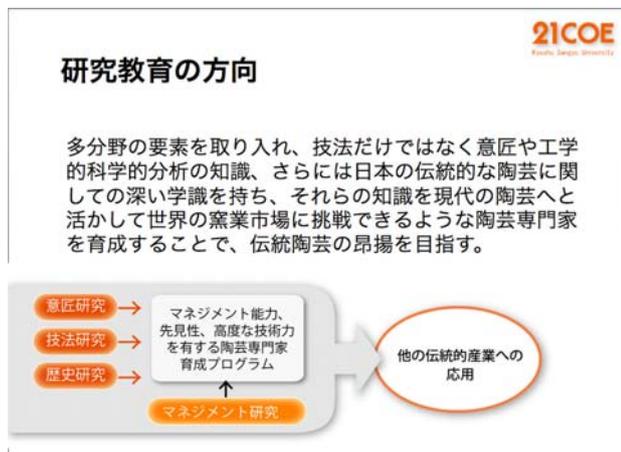
③歴史研究・カリキュラム開発部門：柿右衛門様式磁器を中心とする美術史・文化史的研究を行う。国内と海外(ドイツ・オランダ・英国・フランス・アメリカ)において柿右衛門様式磁器の所在調査を行う。陶芸専門家養成の実態を調査する(韓国・英国・アメリカ)。オランダ東インド会社文書を調査研究する。売立目録を調査し研究する。



申請時における3部門の事業計画

8. 教育実施計画

「柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム」は、意匠研究、技法研究、歴史研究・カリキュラム開発の各部門から構成される。研究センターでは3研究部門それぞれの研究成果を活かし、伝統を踏まえつつ次代の陶芸への展望をも



ちながら、その担い手を養成するカリキュラムを開発する。そのカリキュラムでは「柿右衛門様式陶芸研究センター」を拠点として院生が主体的に学び、互いに意見を交換して講義・演習・実習を通して、高度専門職業人としての実践能力が育成されることを目標とする。更に新カリキュラムでは経済産業省大臣認定の資格である伝統工芸士の資格を院生が取得できる支援システムが組み込まれる。21世紀COEプログラムの事業成果に基づいて、優れた芸術性と高い技術性を兼ね備えた世界陶芸のリーダーとなる人材を育成することが、大学院における陶芸教育の目標とされる。

大学院授業科目

※は三専攻共通

素材研究A	梶原	陶磁器を中心とした伝統的産業の原材料等の素材研究
素材研究B	津留、古賀、小林	陶磁器を中心とした伝統的産業の原材料等の素材分析(解析)
コンピュータ利用技術	釜堀(濱川)	CAD / CAM / CG が一体となった造形及び表現手法の獲得
美術史(イギリス・ドイツ・オランダ)	下村	ヨーロッパの陶磁器を中心とした歴史
陶磁器経済史	山本	陶磁器を含めた伝統的工芸品の歴史
※マーケティング研究(伝統工芸)	内山	消費者ニーズ・流通等を考慮した作品制作のための戦略立案
※消費需要分析	内山	統計的手法を使った消費需要分析の手法
※商品企画研究	釜堀	市場とユーザーを考慮した商品の企画
地場産業論	釜堀、鈴田	様々な伝統的産業の成立要因、歴史等
現地学習	鈴田	九州の伝統的産地見学

全学共通カリキュラム案（検討中）



若手研究者育成の人物像

柿右衛門様式学(全学共通)

人物像	COE メンバー 全員	マネジメントからみた柿右衛門(なぜ柿右衛門は生まれたの?)
時代の要求		歴史的な面から柿右衛門をみる(生まれた時代背景)
美意識		柿右衛門陶磁器の魅力(日本人の美意識と余白の美学)
モノ		柿右衛門の謎に迫る。柿右衛門の技術的な優位性の探求(技術的特性からのアプローチ)

9. 研究教育拠点形成活動実績

① 目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

柿右衛門様式磁器に関する意匠・技法・歴史の3研究部門からの総合的研究、大学院の陶芸教育へのその反映と伝統工芸の水準の昂揚が、本拠点形成計画の全体的な目的である。

意匠研究部門では有田焼文様のデータベース構築、柿右衛門家に伝わる土型の3次元計測と再現、名人技の記録(磁器の全作成工程の映像記録)、デジタル技術を活かした造形手法の提案の4つのテーマに取り組んだ。その結果、データベースには5,066件の有田焼文様の画像(文様数13,493点)が収められた。柿右衛門家所蔵の土型約800点のうち229点を計測し、それらの土型を70%の大きさで再現した。名人技の記録には成形から完成までの全ての工程が約8.5時間の映像、また柿右衛門窯の絵付け職人による実演の映像も2.5時間の映像にまとめられた。また意匠部門でCOEの事業を通して得られたデジタル技術のノウハウを利用して、デザイン学科学生の食器デザイン開発の過程が検証された。以上の結果、当研究部門の目的は十分達成した。

技法研究部門では柿右衛門様式磁器の素材分析とその再現という当初のテーマを達成するため、初期柿右衛門様式磁器について、釉と素地をそれぞれ幾つものサンプルを用いて比較研究し(論集2号)、有田泉山から採取されたロウハを用いて赤絵具を作り、色絵磁器を試作し(論集2号)、陶磁器の色合いを測定し乳白釉の調合に関する研究を行い(論集2号)、有田泉山ロウハと合成ベンガラの両方を持ちいて赤絵具を作り、双方を比較研究した(論集3号)。また柿右衛門様式磁器の原料を湿式分析法によって分析し(論集3号)、フリット調合によって上絵具を再現し、それと古陶磁の色彩を比較し、再現上絵具の出来映えを検証した(論集4号)。更に古陶磁絵具をエックス線で分析し(論集5号)、柿右衛門様式磁器における板作り成形を研究した(論集5号)。以上の結果、当研究部門の目的は十分達成した。

歴史研究・カリキュラム開発部門では柿右衛門様式磁器の国内と海外における所在調査、柿右衛門様式磁器を中心とするオランダ東インド会社による日蘭貿易の調査研究という当初のテーマ

に加えて、COE事業の3年目から売立目録の研究を課題に掲げた。これらのテーマを達成するため、国内および欧米において、柿右衛門様式磁器に関する所在調査を行った。国内の調査機関は東京国立博物館、出光美術館、静嘉堂文庫を初めとする諸機関、国外の調査機関はドイツではドレスデン国立美術館陶磁器収集館等16機関、オランダではフロニンヘン博物館等4機関、英国では大英博物館等20機関、フランスではルーヴル美術館等4機関、アメリカではボストン美術館等3機関である。これに関する報告書として「柿右衛門様式磁器調査報告書」(欧州篇と国内篇の二冊)を刊行した。日蘭貿易における陶磁器輸出の実態を解明するために、オランダ東インド会社文書の調査研究を行い、これに関する報告書として「オランダ東インド会社文書における日蘭貿易磁器輸出記録—送り状(1)」と「オランダ東インド会社貿易史料にみる日本磁器」が刊行された。また柿右衛門様式磁器を中心として肥前磁器に関する売立目録の研究を行い、その成果として「柿右衛門様式研究—肥前磁器 売立目録と出土資料—」を刊行した。更に柿右衛門様式磁器を中心とする肥前磁器に関する研究者のネットワークを形成し、その成果として国際シンポジウム等を3回開催し、講演録を刊行しセンター論集4号に掲載した。第一回「国際シンポジウム 柿右衛門様式磁器の普遍性について」(平成17年12月1~3日)。第二回「世界貿易ネットワークと肥前磁器」(平成18年9月30日)。第三回「17世紀と18世紀の英国における柿右衛門様式磁器の受容について」(平成20年2月23日)。講演録:「柿右衛門様式磁器の普遍性について」、平成18年、および“Studies of Hizen Porcelain — On Research Issues in England and Germany—”、平成21年。セーヴル国立陶磁器博物館主任学芸員クリスティーン・清水氏による3回の講演会を行った(平成16年10月21~23日)。講演1.「セーヴル国立陶磁器博物館に見る陶磁器の歴史」、講演2.「フランスの磁器」、講演3.「フランスの陶磁器における日本の様式」。これに関する講演録は刊行された(「センター論集講演録」、平成17年)。若手研究者育成のため、若手研究者研究会を13回開催し、その研究成果として、「赤絵の道I 若手研究者研究会論集」(平成19年6月)を刊行した。カリキュラム開発については、英国(バーナード・リ

一チ窯、ウェッジウッド本社)、アメリカ(ニューヨーク州立アルフレード大学陶芸学部)および韓国(梨花女子大学校、弘益大学校)においてカリキュラム調査を行った。その結果、当研究部門の目的は十分達成した。

以上のように、拠点形成計画全体の目的は十分達成したと、みなされる。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

若手研究者の人材育成面の成果として、柿右衛門様式陶芸研究センタープログラムに属する若手研究者や日本学術振興会特別研究員による学位取得(いずれも九州産業大学)と調査報告書の刊行が挙げられる。博士の学位取得者は以下の3人である。取得時期はいずれも平成21年3月である。

松下広樹：博士(芸術)：伝世品に見る柿右衛門様式磁器の成形技法及び文様の研究(論文名)、日本学術振興会特別研究員、COE研究員

古賀裕子：博士(芸術)：柿右衛門様式磁器色絵人形の歴史的背景と意匠及び技術的側面からみた特異性(論文名)、若手研究者、日本学術振興会特別研究員

山本紗英子：博士(芸術)：柿右衛門様式磁器に描かれた人物文様を読む(論文名)、若手研究者

また日本学術振興会特別研究員黒木宏一は指導教授の内山敏典教授とともに報告書「有田・伊万里および福岡地域における消費者の意識調査分析—新しい陶磁器需要創造および生産構造をめざして—」(A5版、総頁516頁)を刊行した。

これらの成果が拠点形成に寄与した点は、松下論文が最盛期の柿右衛門様式磁器以降、忘れられていた板作りの成形技法を研究してその技法を復活させたこと、古賀論文が柿右衛門様式磁器人形の諸問題に日本で初めて本格的に取り組んだこと、山本論文についても柿右衛門様式磁器の人物文様の意味について同様のことが言えること、等である。黒木による報告書は佐賀新聞や業界紙で取り上げられ、陶磁器需要創造に関する提言が注目されている。

3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

報告書「柿右衛門様式研究—肥前磁器 売立目

録と出土資料—」(A4版、605頁)は、肥前磁器に関する売立目録についての従来の調査研究を継続するとともに、この分野で画期的な意義を有すると評価される。肥前磁器に関する売立目録は全国に4,000冊以上あると言われている。本報告書で取り上げられているのは、東京文化財研究所1,792冊、出光美術館488冊、岩瀬文庫210冊、の計2,473冊である。この報告書には肥前磁器に関する多数の新資料が加えられ、この分野のこれからの研究に新しい光を当てる資料として活用され、新知見を拓く源泉となることが期待される。

「柿右衛門様式磁器調査報告書—欧州篇—」(A4版、415頁)は、ドイツ、オランダおよび英国において柿右衛門様式磁器の所在調査を行った報告書である。日本語と英語で併記される。陶磁史研究におけるこの報告書の画期的な意義は、調査の対象を柿右衛門様式磁器に特定し、しかも海外におけるその所蔵の大半を占めると想定されるドイツ、オランダ、英国の宮殿、邸館および美術館に所蔵される柿右衛門様式磁器を具に調査して、それをカタログ化し、それに詳細なデータと関連資料を添えたことである。欧州所在の942点に及ぶ柿右衛門様式磁器に関するこの報告書は、今後の柿右衛門様式磁器研究に不可欠の資料となり、大いに活用されることが確信される。

“Pigments of Hizen Porcelain in the 17th and 18th centuries—focused on the researches into the history of coloration and the reproduction of Japanese traditional pigments—” (A4版、111頁、英文)は、17~18世紀における肥前磁器の顔料を科学的に分析して、当時の顔料を今日に再現した試みに関する詳細な報告書である。今後の肥前磁器顔料の研究に不可欠の文献になることが確信される。

“Studies of Hizen Porcelain — On Research Issues in England and Germany—” (A4版、59頁、英文)は、17~18世紀の英国における柿右衛門様式磁器の受容、19世紀以降の英国における柿右衛門様式研究史およびドイツのプロイセンとザクセンにおける東アジア磁器収集に関する論考が収められる。英国とドイツにおける柿右衛門様式磁器の受容に関して新知見を拓くものと評価される。

「オランダ東インド会社文書における日蘭貿易磁器輸出記録—送り状(1)—」と「オランダ

東インド会社貿易史料にみる日本磁器」は、オランダ東インド会社文書（原本はオランダ・ハーグの国立古文書館所蔵）を、東京大学史料編纂所所蔵のマイクロフィルムにより、その送り状と仕訳帳を、翻刻・翻訳した報告書である。17世紀から18世紀にかけての日蘭貿易における肥前磁器貿易の実態を今後明らかにしていく上で重要な文献になる。

「柿右衛門様式磁器の普遍性について」は、平成17年度に行われた同題の国際シンポジウムの講演録である。ドイツ、オランダ、英国、チェコ、日本の陶磁史関係の第一人者による講演とパネル・ディスカッションの記録集である。この国際シンポジウムで初めて柿右衛門様式磁器について各分野から総合的に学問的な研究が発表され、総合的に討議された。この講演録はその貴重な記録である。

以上の報告書にみるように、21世紀COE「柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム」は5年に亘る事業で、「柿右衛門学」とでも称される柿右衛門様式磁器に関する総合的研究という新たな学問分野を創成したといえることができる。この創成は日本の伝統的な各工芸分野に関する今後の学問的な総合的研究のモデルケースとなり得る。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

意匠研究、技法研究、歴史研究・カリキュラム開発の3部門は各部門のリーダーが連携して相互に協力した。例えば歴史研究部門の海外調査には技法部門の事業推進担当者も参加して、写真撮影や鑑定などに大いに協力した。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

「柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム」における柿右衛門様式磁器に関する総合的研究は、陶磁器研究に関する国際的なネットワークをこれまで形成してきた。それは陶磁器関係を中心とする国際的な共同研究を推進することに繋がり、ひいては国際競争力ある大学づくりに貢献することになると考えられる。

6) 国内外に向けた情報発信

「柿右衛門様式陶芸研究センター」は定期的に「ニュースレター」（1～13号）と「九州産業大

学柿右衛門様式陶芸研究センター論集」（1～5巻）を刊行し、各関係機関に送付してきた。

研究成果報告書と講演録についても、各関係機関に送付してきた。3回に及ぶ公開の国際シンポジウム等を開催した。

3回に及ぶ公開の「柿右衛門様式磁器再現作品・パネル展示会」を開催した。

「九州産業大学公開講座」では6回に亘り、事業推進担当者と研究員によって研究成果が発表された。

「COEセミナー」を定期的で開催し、柿右衛門様式磁器に関する諸テーマを巡って専門家を招聘し、その講演をこれまで22回に亘って公開した。

7) 拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

できるだけ無駄を省き、研究上必要と考えられた項目に効果的に予算が配分されるように慎重に配慮された。

②今後の展望

COEとしての事業は終了するが、「柿右衛門様式陶芸研究センター」は存続させて、大学予算の範囲内でこれまでの事業内容を継続するとともに、これまでのCOEプログラムによる研究成果を大学院と学部の教育に活かす方針である。

③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

柿右衛門様式磁器に関する国際的な総合研究並びに、国際的なネットワークの形成によって、日本の伝統工芸の芸術的な価値に対する認識度が、国内外で昂ったことは明らかである。同磁器に関する同磁器の総合的な研究によって多方面の資料が蓄積され、その成果が報告書にまとめられ、再現作品によって具現化されている。それらが今後柿右衛門様式磁器に関する国際的な研究にとって重要な文献となり、参照作品となることは大いに確信される。

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	九州産業大学	拠点番号	K28
拠点のプログラム名称	柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム		
<p>1. 研究活動実績</p> <p>①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、DP（ディスカッション・ペーパー）、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの <p>※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入 波下線（~~~~~）：拠点からコピーが提出されている論文 下線（_____）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・朴泰成、寛文期から享保期における柿右衛門様式の変遷と狩野派との相関性、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第1号、3～10頁、2005年 ・櫻庭美咲、オランダ東インド会社日本商館文書における肥前磁器貿易史料-1650～70年代の医療製品取引に関する史料研究の再考-、東京大学史料編纂所研究紀要第16号、36～49頁、2006年 ・釜堀文孝、陶磁器産業の抱える問題について-卸、販売、製造業を含めた陶磁器業界に関する問題把握-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第2号、1～6頁、2006年 ・釜堀文孝、陶磁器産業の諸問題と展望についてのアンケート分析-研究機関が陶磁器製造業に果たす役割について-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第2号、7～16頁、2006年 ・梶原茂正、初期柿右衛門様式磁器における釉および素地の比較研究、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第2号、227～234頁、2006年 ・朴泰成・小林繁夫・古賀道生・梶原茂正・津留壽昭、初期柿右衛門様式磁器における有田泉山ロウハからの赤絵の具と色絵磁器の試作、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第2号、235～242頁、2006年 ・松下広樹、陶磁器の色合い測定及び乳白釉の調査に関する研究、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第2号、243～250頁、2006年 ・山本盤男、近世肥前磁器輸出に関する経済史研究の成果と課題-邦語文献を中心に-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第2号、263～274頁、2006年 ・櫻庭美咲、オランダ東インド会社文書におけるオランダ向け肥前磁器の絵付けの記載について、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第2号、275～296頁、2006年 ・古橋千明、Modern Kakiemon Wares -The 20th and 21st Century Kakiemon Style、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第2号、297～316頁、2006年 ・内山敏典・山本盤男、佐賀県における陶磁器需要構造分析-産業連関分析からアプローチ-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、21～32頁、2007年 ・古賀裕子、柿右衛門様式磁器色絵婦人像にみる写実性 -型技法を中心に、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、47～54頁、2007年 ・梶原茂正・日高昌則・R. P. Wijesundera・L. S. R. Kumara・古賀道生・津留壽昭・古賀啓子・下村耕史・Jae-Young Choi・Young Jun Park、Correlation between Red enamel over glaze of Kakiemon-style and Izumiyama porcelains、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、55～69頁、2007年 ・朴泰成・小林繁夫・古賀道生・梶原茂正・津留壽昭、有田泉山ロウハと合成ベンガラによる赤絵具の試作、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、71～75頁、2007年 ・松下広樹、柿右衛門様式磁器の壺における成形及び器形の研究、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、83～95頁、2007年 ・山本紗英子、柿右衛門様式磁器にみる「渡唐天神像」の図像に関する研究、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、97～111頁、2007年 ・古橋千明、英国における柿右衛門研究史(1) -19世紀から1940年代まで、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、113～140頁、2007年 ・シンシア・フィアレ、オランダ東インド会社の取引および私貿易による17、18世紀の日本磁器貿易、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、141～152頁、2007年 ・ジェフリー・チャールズ・ガン、17世紀の日本 - ユーラシア磁器貿易ネットワーク、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、153～171頁、2007年 			

- ・ 櫻庭美咲、オランダ東インド会社文書にみる17世紀肥前磁器輸出の史料分析-バタヴィア=アジア域内の流通を中心に-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、173～190頁、2007年
- ・ 山本盤男、国際研究フォーラム「世界貿易ネットワークと肥前磁器」の成果と課題、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号、191～202頁、2007年
- ・ 下村耕史、柿右衛門様式陶芸の技術と芸術、応用物理学会応用物理第76巻第11号、1279～1282頁、2007年
- ・ 釜堀文孝・小川規三郎・上田勝也、有田焼文様のデータベース構築に関する研究(2)-文様のデータベースの設計-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、1～9頁、2008年
- ・ 内山敏典、徳川幕府期における伊万里焼国内流通の研究-筑前における陶器商人の役割を例として-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、11～25頁、2008年
- ・ 朴泰成・松下広樹・小林繁夫・古賀道生・梶原茂正・津留壽昭、フリット調合による上絵具の再現と古陶磁器との色彩の比較検証、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、27～36頁、2008年
- ・ 下村耕史、柿右衛門様式磁器の文様構成について、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、37～52頁、2008年
- ・ 山本盤男、17世紀後半の肥前磁器の輸出価格に関する考察、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、53～76頁、2008年
- ・ 高辻知義、アウグスト強王とマイセン磁器マニュファクチュアの背景、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、77～92頁、2008年
- ・ 古橋孔明、英国における柿右衛門研究史(Ⅱ) -1950年代から1970年代まで-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、93～120頁、2008年
- ・ 古賀裕子、柿右衛門様式磁器色絵婦人像の再現-原型製作から本焼焼成まで-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、121～129頁、2008年
- ・ 山本紗英子、柿右衛門様式磁器に描かれた風俗図に関する研究、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第4号、131～139頁、2008年
- ・ 荒川正明、肥前磁器が鑑賞美術となった時代-売立目録の語る近代の古陶磁評価-、柿右衛門様式研究-肥前磁器 売立目録と出土資料-、414～426頁、2008年
- ・ 内山敏典、売立目録検索システムのデータからの統計分析、柿右衛門様式研究-肥前磁器 売立目録と出土資料-、427～443頁、2008年
- ・ 山本盤男、柿右衛門様式磁器の1920代の売立における価格に関する考察、柿右衛門様式研究-肥前磁器 売立目録と出土資料-、444～453頁、2008年
- ・ 櫻庭美咲、売立目録研究に基づく柿右衛門様式磁器の流通史-大正から第二次世界大戦以前を中心に-、柿右衛門様式研究-肥前磁器 売立目録と出土資料-、454～471頁、2008年
- ・ 堀内秀樹・坂野貞子、江戸の陶磁器消費と柿右衛門、柿右衛門様式研究-肥前磁器 売立目録と出土資料-、475～494頁、2008年
- ・ 黒木宏一・内山敏典、有田・伊万里および福岡地域における消費者の意識調査分析-新しい陶磁器需要創造および生産構造をめざして-、1～516頁、2009年
- ・ 吉岡聰・原一広・野上建紀・梶原茂正、古陶磁絵具のX線分析、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第5号、25～30頁、2009年
- ・ 高辻知義、アウグスト強王とマイセン磁器マヌファクトゥア成立の背景をめぐって、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第5号、31～36頁、2009年
- ・ 櫻庭美咲、明治期における柿右衛門様式磁器の流通-外国人の収集と海外輸出を中心に-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第5号、37～57頁、2009年
- ・ ザムエル・ワットヴァー(翻訳:高辻知義)、 毀れやすい華麗さと政治的表象-多義的な財宝としてのプロイセンとザクセンのバロック磁器室-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第5号、59～69頁、2009年
- ・ 黒木 宏一、陶磁器需要に関する意識調査分析-クロス集計結果に基づくカイ2乗検定と調整化残差分析-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第5号、103～123頁、2009年
- ・ 黒木宏一・内山敏典、陶磁器需要に関する意識調査に基づく因果分析-多重分類分析法からのアプローチ-、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第5号、125～168頁、2009年
- ・ 古賀裕子、柿右衛門様式磁器色絵人形の意味性、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第5号、189～204頁、2009年
- ・ 山本紗英子、柿右衛門様式磁器に描かれた唐様人物文様の世界、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第5号、205～234頁、2009年

②国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

1. 国際シンポジウム

開催時期：2005年12月1日～12月3日

場 所：福岡市美術館(12/1～2) 佐賀県立九州陶磁文化館(12/3)

会議等の名称：国際シンポジウム「柿右衛門様式磁器の普遍性について」

参加人数：534名(20名)

主な招待講演者：

- ①ウルリッヒ・ピーチュ(ドイツ・ドレスデン国立美術館磁器コレクション館長)
- ②ヴィルヘルム・ジーマン(ドイツ・ヨーロッパ磁器産業博物館館長)
- ③鄭良謨(韓国・前国立中央博物館館長)
- ④大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館副館長)

2. 国際研究フォーラム

開催時期：2006年9月30日

場 所：九州産業大学

会議等の名称：国際研究フォーラム「世界貿易ネットワークと肥前磁器」

参加人数：182名(2名)

主な招待講演者：

- ①シンシア・フィアレ(オランダ・ライデン大学ヨーロッパ拡張史研究所研究員)
- ②ジェフリー・チャールズ・ガン(長崎大学経済学部教授)
- ③松井洋子(東京大学史料編纂所助教授)
- ④伊藤嘉章(東京国立博物館平常展室長)

3. 国際シンポジウム

開催時期：2008年2月23日

場 所：九州産業大学

会議等の名称：国際シンポジウム「17世紀と18世紀の英国における柿右衛門様式磁器の受容について」

参加人数：167名(2名)

主な招待講演者：

- ①パトリシア・ファーガソン(ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館陶磁器展示室プロジェクトコンサルティングキュレーター)
- ②ニコル・クーリッジ・ルマニエール(セインズベリー日本藝術研究所所長)
- ③大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館館長)

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

1. 若手研究者による研究報告会の開催

COE 研究員および若手研究者らが、各自の研究を口頭発表し、さらに発表後のディスカッションを行うことを通じて、発表技術を高め、相互に学び合うための場として平成17年12月に発足した。博士論文や当センター発行の論集、あるいは外部の学術出版物へ投稿する論文について、事前に意見交換したり、学会発表の練習に役立てるなど、若手研究者育成に努めた。

第1回(2005年12月)：活動内容・方向性についてのディスカッション

第2回(2006年1月)：発表者：山本紗英子 テーマ：柿右衛門様式にみる源氏物語

第3回(2006年2月)：発表者：松下広樹 テーマ：陶磁器の色合い測定及び乳白釉の調査にむ関する研究
発表者：朴泰成 テーマ：上絵具の化学分析とその構造)

第4回(2006年3月)：発表者：古賀裕子 テーマ：柿右衛門様式磁器の人物像について

第5回(2006年4月)：発表者：黄承基 テーマ：台湾東寧王朝の海上貿易と日中陶磁器輸出との関連性-景德鎮と肥前磁器を中心に-

第6回(2006年5月)：発表者：古橋千明 テーマ：バリーハウス・コレクションについて

第7回(2006年6月)：発表者：櫻庭美咲 テーマ：マイセンの「インド花」-柿右衛門様式が与えた影響と「奇想様式」の花のイメージの成立-

第8回(2006年7月)：発表者：山本紗英子 テーマ：柿右衛門様式磁器と渡唐天神

第9回(2006年10月)：発表者：松下広樹 テーマ：電子顕微鏡にみる釉薬

第10回(2006年11月)：発表者：黄承基 テーマ：明末清初の台湾における海外貿易の重要性
発表者：古賀裕子 テーマ：柿右衛門様式婦人像の複製制作-原型制作まで-

第11回(2007年1月)：発表者：櫻庭美咲 テーマ：オランダ東インド会社の概略とその応用の可能性に関する考察-基礎事項の共有のために-

第12回(2007年2月)：発表者：古橋千明 テーマ：比較研究:英国とドイツの柿右衛門コレクション

第13回(2007年3月)：若手研究者研究会の論集「赤絵の道」について打合せ

第14回(2007年4月)：発表者：山本紗英子 テーマ：柿右衛門様式磁器「色絵司馬温公甕割図皿」を読む-意匠に込められた儒教性-

第15回(2007年5月)：発表者：松下広樹 テーマ：伝世品にみる柿右衛門様式磁器の轆轤成形技法について

第16回(2007年6月)：発表者：古賀裕子 テーマ：柿右衛門様式磁器色絵婦人像の定義

第17回(2007年9月)：発表者：古橋千明 テーマ：英国における柿右衛門研究史-19世紀を中心に

第18回(2007年10月)：発表者：櫻庭美咲 テーマ：売立目録の調査・研究について 中間報告

第19回(2008年2月)：発表者：山本紗英子 テーマ：柿右衛門様式磁器に描かれた風俗図に関する研究

最終研究報告会(2008年12月)：

発表者：山本紗英子 テーマ：柿右衛門様式磁器にみる人物文様の世界

発表者：松下広樹 テーマ：柿右衛門様式磁器にみる板づくり成形の研究

発表者：古賀裕子 テーマ：柿右衛門様式磁器色絵人形の技術面における特異性

発表者：黒木宏一 テーマ：陶磁器需要の意識調査に基づく計量分析

発表者：櫻庭美咲 テーマ：売立目録研究に基づく柿右衛門様式磁器の流通史-大正期から第二次世界大戦以前を中心に-

発表者：古橋千明 テーマ：後期スチュアート朝英国における肥前磁器コレクション形成について

2. 実技研修会の開催

平成17年4月～平成21年3月の期間、毎月1回、若手研究者および特別研究員等への実技指導を行った。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成された

(コメント)

拠点形成計画全体については、柿右衛門様式を中心に陶磁器の技術の保存・発展、各方面への発信において、世界的水準の研究となった。北九州地域というローカルな場を対象としつつ、世界を視野に収めたユニークな研究戦略をとったことや、相対的には少額の経費にも拘わらず、最高度の成果を達成したことなど、21世紀COEプログラムの一つのあり方を示す好例であると考えられる。

人材育成面については、研究者・学生と陶芸家との連携による若手研究者・制作者の養成という側面に関して、磁器制作・研究という特殊性の高い分野であることを考慮すれば、十分に評価できる。

研究活動面については、作陶技術に関して、板作り成形技法の再発見・復活、柿右衛門作品の3次元計測、柿右衛門様式磁器に関する資料のデータベース化など、技術継承のために画期的な成果を収めた。また、在外柿右衛門作品の総合的調査については、日本語報告書、及び英文研究報告書が作成されている。この結果、ドレスデン国立美術館陶磁器収集館などドイツの16機関をはじめ、数十の機関とのネットワークが形成され、国際柿右衛門学とでも称すべき学問領域を構築した。このことより、日本を代表する芸術文化を国際的な交流と検証の場に提供することを可能とした。

補助事業終了後の持続的展開については、人文学・芸術学において、本プログラムが極めてユニークな地位を占めることから、今後とも広く内外に公表・発信されることが強く望まれる。